

# 中国軍の核兵器の老朽化と事故対処

漢和防務評論 20180706(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

核兵器の事故は、問題が大きい割に各国とも秘匿度を高くし、完全に公表されることは今まで少なかった、と思います。  
中国の核ミサイル及び核弾頭は 1970 年代に造られたものもあり、使用期限を過ぎた核兵器をどのように処理しているのかも中国は公表していません。実際は、事故が頻発しているようです。  
中国の核潜水艦が我が国周辺で核事故を起こすとその影響は測りしれません。

劉文濤米国

ワシントンで、権威ある情報筋から中国ロケット軍の核兵器の老朽化に関する情報を得た。中国の戦略ミサイルは、DF-31A 及び DF-41 型 ICBM が続々と配備を開始し表面的には更新されつつある。實際上、ワシントンの一部の高級専門家は、中国核兵器の老朽化による核事故が発生する可能性を憂慮している。消息筋は、次のように述べた：中国ロケット軍の戦略ミサイルは、引続き新しい型式に更新されつつある。しかし核弾頭及び老朽化した戦略ミサイルは、すでに使用期限に達しており、現在老化現象とみられる事故が頻発している、と。ロケット軍においては、2017 年、DF-5A、DF-4 或いは少量の DF-3A が未だに就役している。これらのミサイルは、1970 年代、1980 年代の初めに配備されたものである。部品はすでに生産を停止している。ワシントンの権威筋は次のように述べた：過去数年間、ロケット軍内部で核事故が多発している。事故の内容は、核材料部品からの漏洩、酸化による腐蝕、核弾頭の変質、核弾頭の爆裂（非核爆発）である。

外部世界は、今まで中国ロケット軍内部で核弾頭、核物質材料に何度も事故が発生していることを知らなかった。これらの事故はすでに外部世界の関心の的になった。したがってワシントンの消息筋は次のように述べた：中国ロケット軍の上述の核弾頭、長距離戦略ミサイルの効力には疑問がある、と。中国の核兵器運用に関しては、不明な点があり、外部世界はこれらの核施設、核材料がどの程度老朽化しているのかは分からない。一部の核ミサイル、核弾頭は、朝鮮半島近辺及び中央アジアの内陸部に配備されている。

原則上、核弾頭は規格化されている。例えば、ある種の核弾頭は、様々な戦略ミサイルで同時に運用することができる。しかし中国の多くの核弾頭は 1970 年代に生産されたものである。しかも退役した後の DF-5 の核弾頭はどのように処理されるのか？不明である。中国は、核弾頭の処理情報さえ国家機密にしている。

ワシントンの消息筋は、その他の重要情報も披露した。すなわち中国の核潜水艦も事故が頻発しているという。国際的に見て、各国海軍の核潜水艦の事故率

の計算法は共通している。中国の核潜水艦の事故率はロシアに比べれば少ないが、欧米に比べると、かなり多い。消息筋は次のように述べた：ロシアの核潜水艦の数が中国に比べて多いことを考慮すると、1 艘当たりの平均の事故率は中国が最も高い、と。これらの事故は機械的事故と人的事故に分けられる。それぞれが約半数を占める。海軍のミサイル核兵器にも部品の損壊現象が見られる。現在中国は JL-1A 核ミサイル (SLBM) を使用している。主に唯一の 092 型戦略核潜水艦に搭載している。092 は實際上、出港期間が短い。KDR の計算では、2017 年、092 の在港期間が年間 80 日以上に達した。JL-1A に搭載されている核弾頭は前世紀に生産されたものだ。

この問題に対して、中国軍は問題の重大性を認識しているのかどうか？消息筋は次のように述べた：公開された情報を見ると、何度も行われた国家核事故緊急対処演習 (イージスシリーズ) は、軍民共同の国家聯合演習であった。演習にはロケット軍の装備検査部隊及び運輸部隊が演習に参加した。

運輸部隊が演習に参加した理由は、ロケット軍の一連の核事故は、核弾頭の運搬中に発生したからである。KDR は何度も指摘した：ロケット軍は、弾頭貯蔵基地とミサイル発射陣地は離れている、と。現実に核戦争が起こった場合、弾頭貯蔵基地は、直ちにミサイル陣地に核弾頭を運搬しなければならない。その後、装填され、発射される。

消息筋は世界で初めて次のように述べた：数年前、聯合参謀部及びロケット軍内部に” 突発事件処理指導グループ” が設立された。このグループは核事故の処理を専門に行う。このグループは、レベルが高く、ロケット軍の副司令 1 名、聯合参謀部副参謀長 1 名が実際の指揮をする。名義上は、聯合参謀長が指導グループの指揮官である。

同グループの下に、突発事件処理指導担当事務所を設けた。同事務所の主任は、聯合参謀部作戦部長が兼任し、軍の突発事件緊急処理業務の管理機構及び指導単位として、日常から緊急処理業務の準備をするとともに、関連する業務を行う。同事務所は、核及び生物化学関連突発事件への緊急対処能力を強化するため、核生物化学担当グループを設けた。このグループは、軍訓部陸軍建設局防化室が兼務し、軍の核及び生物化学兵器に関連する突発事件処理を専門に担当する。同時に事務所の下に核及び生物化学専門家の諮問グループを設けた。諮問グループのメンバーは、軍の内外から専門家を招請した。彼等は緊急準備と処理活動について専門家として諮問に答える。総部の突発事件処理指導担当事務所の主要な職責は以下のとおり：

- A. 軍の核及び生物化学突発事件緊急処理業務の計画、任務分担、検査監督、会計業務に関すること。
- B. 国家の核及び生物化学突発事件緊急管理事務所と関係を図り、有効な通信連絡手段を確立し、地方政府組織の関連活動に参加する。
- C. 党中央、国务院、中央軍事委員会の関連指示を伝達し徹底させる。
- D. 専門家グループの業務の手順を確立する。軍及び地方の各方面の専門家を招請し、専門家グループを編成する。
- E. 軍の各級部隊を指導し、核及び生物化学突発事件緊急救援計画案を制定する。
- F. 緊急対処室は、軍の核及び生物化学突発事件緊急支援室を兼務する。

G. 国家の核及び生物化学突発事件緊急管理事務所の支援要求と軍区の依頼を根拠に、戦区、海軍、ロケット軍に対し、専門部（分）隊の派遣と核及び生物化学突発事件緊急支援の命令を下達する。

これは、軍の核事故処理グループの機構である。一旦、戦略ミサイルの核事故が発生すると、核放射能は必ず地方の住民の安全を脅かす。これに対してはどのように処理するのであろうか？

消息筋は次のように述べた：中国国務院は、”国家核及び生物化学突発事件緊急関係委員会連絡員グループ”を設立し、軍との関係業務を担当させた。国務院と軍総部の各メンバーは、それぞれの単位が派遣した人員で構成され、各単位が派遣した連絡員は人員を適宜入れ替えることによって、連絡員グループの有効な活動を確保していた。そのほか、軍の総部の関連単位は連絡員を派遣し、国家核及び生物化学突発事件緊急管理事務所の日常の管理業務に参加している。たとえそうであったとしても、中国軍の核兵器の管理、特に核弾頭の運搬及び核弾頭の期限切れ問題については、十分に注視することが必要である。

以上